

いふは神仙のあたりなり、千載集詞書にも、みたけより大峯にまかりはいりて、神仙といふ所にてとあり。

〔和州巡覽記〕凡此山は、六田の方の麓より、奥の院まで百餘町の間、民家なき所は、左右皆並木の櫻也、又左右の傍も、下の谷も、左右のかげなる所々の谷々にも、皆櫻多し、まれに杉有、二三月は花の世界と云つべし、櫻は谷底に多くして、山にはなし、春は麓より先花開初て、やうやく山に咲のばりて、奥の院にておはる、麓の花盛過て、中の花盛になる、中の花盛過て、上の花盛に開く、其間大やう三十日許有、又晚櫻は麓にも所々に在て、春の季、奥の院の花盛の比、盛に開く有、初櫻は高き所にあるも早く咲也、凡此山の櫻は、皆一重なり、八重櫻は山中及民家僧坊に一株もなし、寒風はげしき年、或風雨久しく續けば、花の容色あし、故に年に寄て好否あり、山僧の曰、此四十年以前は、今よりも此山に櫻多し、今は昔より少なし、山僧又曰、凡此山の花、上中下一時に不開といへども、大やう立春より六十五日に當る比を盛の最中とす、又里人數人に問にも、皆如此いへり、但年の寒温によりて遲速あり、是町より前の櫻多き所のさかりにあたる、吉野の町より少前東の方に山のさし出たる所有、櫻のさかり此あたりより、左の谷の内まへよりむかひ、左より右およそ方二十町ばかり、たゞ一目に見えて、皆花の林なり、おもしろき事たとへていはんかたなし、雪のあけばのはたゞひたしろにて、わいだめなし、此所花のところぐにさきほころびたるよそほひ、うき世の外の物にやとあやしまる、およそ櫻は雲すきに見えたるはあやなし、山のかたほとり、又谷そこにありて、むかひにすき間なき所にあるを見たるがよき也、此所の花は、四邊の山のかたはら、谷のそこにあるを、たかき所よりのぞみ見て、たとへば大なる益などの内を見るやうにぞ侍る、かうやうのめでたき見ものは、やまとには云におよばず、おそらくは見ぬもろこしにもあらじとぞ思ふ、其外のあだし國はさら也、子守より上の花はおそし、此山にて櫻を切事を甚禁